

平成30年度「日本遺産 (Japan Heritage)」認定概要

- ① ◎上川町，旭川市，富良野市，愛別町，上士幌町，上富良野町，鹿追町，士幌町，新得町，当麻町，東川町，比布町（北海道）

※◎印は代表自治体（以下同）

《カムイと共に生きる上川アイヌ～大雪山のふところに伝承される神々の世界～》

（ストーリーの概要）

美しく厳しい大雪山のふところに、カムイ～神～を見出し共に生きた“上川アイヌ”。

彼らは激流^{ほとばし} 迸る奇岩の溪谷に魔神と英雄神の戦いの伝説を残し、神々への祈りの場として崇めた上川アイヌの聖地には、クマ笹で葺かれた家などによりコタンを形成し祈りを捧げ続ける。

上川アイヌは「川は山へ^{さかのぼ} 溯る生き物」と考え、最上流の大雪山を最も神々の国に近く、自然の恵みをもたらす、カムイミンタラ～神々の遊ぶ庭～として崇拝してきた。

神々と共に生き、伝承してきた上川アイヌの文化は、この大地に今も息づいている。



【大雪山の雄大な自然】

- ② ◎山形県（山形市，寒河江市，天童市，尾花沢市，山辺町，中山町，河北町）

《山寺^{やまでら}が支えた紅花^{べにばな}文化》

（ストーリーの概要）

鬱蒼^{うつそう}と茂る木々に囲まれた参道石段と奇岩怪石^{きがんかいせき}の景勝地「山寺」。この山寺から始まった紅花栽培と紅花交易は莫大な富と豊かな文化をこの地にもたらした。石積の板黒塀^{いしづみ いたくろべい}と堀に囲まれた広大な敷地を持つ豪農・豪商屋敷には白壁の蔵座敷^{くらざしき}が立ち並び、上方文化^{かみがたぶんか}とのつながりを示す雅^{みやび}な雛人形^{ひなにんぎょう}や、紅花染^{べにばなぞ}めの衣装を身に着けて舞^{まわ}う舞楽^{まがく}が今なお受け継がれ、華やかな^{いろど}彩りを添える。この地の隆盛を支えた山寺を訪れ、今も息づく紅花畑^{べにばな}そして紅花豪農・豪商の蔵座敷^{くらざしき}を通して、芭蕉^{ばしやう}も目にした当地の隆盛^{しの}を偲ぶことができる。



【山寺】

③ 宇都宮市（栃木県）

《地下迷宮の秘密を探る旅 ～大谷石文化が息づくまち宇都宮～》

（ストーリーの概要）

冷気が張りつめるこの空間は一体、どこまで続き、降りていくのだろうか。壁がせり立つ巨大な空間には、柱が整然と並び、灯された明かりと柱の影が幾重にも続く。柱と柱の間を曲がると、同じ光景がまた目前に広がり、しだいに方向感覚が失われていく。

江戸時代に始まった大谷石採掘は、最盛期に年間 89 万トンを出荷する日本屈指の採石産業として発展し、地下に巨大な迷宮を産み出していった。

大谷石の産地・宇都宮では、石を「ほる」文化、掘り出された石を变幻自在に使いこなす文化が連綿と受け継がれ、この地を訪れる人々を魅了する。



【地下迷宮「カネイリヤマ採石場跡地」】

④ ◎那須塩原市，矢板市，大田原市，那須町（栃木県）

《明治貴族が描いた未来 ～^{なすの}那須野が^{はら}原^{ろまんたん}開拓浪漫譚～》

（ストーリーの概要）

わずか140年前まで人の住めない荒野が広がっていた日本最大の扇状地「那須野が原」。

明治政府の中枢にあった貴族階級は、この地に私財を投じ大規模農場の経営に乗り出します。

近代国家建設の情熱と西欧貴族への憧れを胸に荒野の開拓に挑んだ貴族たち。その遺志は長い闘いを経て、那須連山を背景に広がる^{ほうじょう}豊饒の大地に結実しました。

ここは、知られざる近代化遺産の宝庫。那須野が原に今も残る華族農場の別荘を訪ねると、近代日本黎明期の熱気と、それを牽引した明治貴族たちの足跡を垣間見ることができます。



【那須野が原の大パノラマの中に佇む松方別邸】

⑤ 南砺市（富山県）

《宮大工の鑿^{のみ}一丁から生まれた木彫刻美術館・井波》

（ストーリーの概要）

瑞泉寺^{ずいせんじ}の再建に端を発し、宮大工の鑿^{のみ}一丁から生まれた華麗にして豪壮な井波彫刻と、その木彫刻職人たちが造りあげたまち井波。彫刻工房と町家が軒を連ねる石畳の通りには、木槌の音が響き、木々の薫りが漂う。通りには至るところに七福神や十二支などの木彫刻が飾られ、まちはさながらに木彫刻の美術館である。春には井波彫刻で飾られた曳山や屋台、獅子舞がまちを練り歩き、地域の安泰や五穀豊穡を祈る。地域の暮らしに根づく井波彫刻は、その高い技術力や芸術性を広く全国から認められ、今や日本の木彫刻文化の護り手となっている。



【受け継がれる木彫刻の技】

⑥ ◎山梨県（山梨市、笛吹市、甲州市）

《葡萄畑が織りなす風景－山梨県峡東地域－》

（ストーリーの概要）

甲府盆地の東部は平坦地から傾斜地まで葡萄畑が広がり、初夏には深碧の絨緞、秋には紅葉の濃淡が日に映え、季節ごとに様々な風景を魅せてくれます。

奈良時代から始まったと伝えられる葡萄栽培は、先人たちの知恵と工夫により、かつて水田や桑畑だった土地を一面の葡萄畑に変え、またその葡萄畑に育まれたワインは日常のお酒として地域に根付きました。今も歴史を語る技術や建物は受け継がれ、葡萄畑の風景の中に溶け込んでいます。



【秋の葡萄畑】

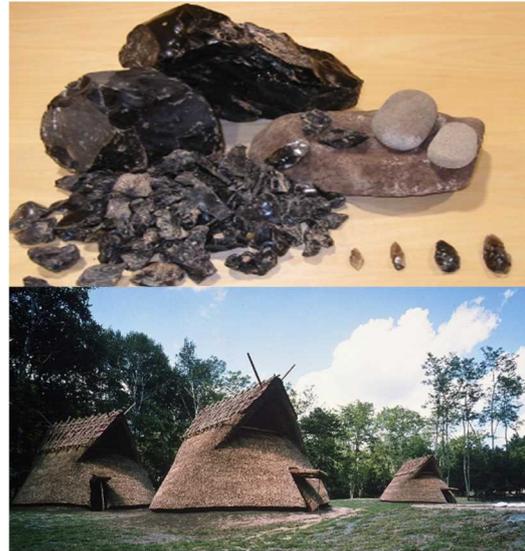
- ⑦ ◎長野県（茅野市，富士見町，原村，諏訪市，岡谷市，下諏訪町，長和町，川上村），
山梨県（甲府市，北杜市，韮崎市，南アルプス市，笛吹市，甲州市）

《星降る中部高地の縄文世界—数千年を^{さかのぼ}る黒曜石鉱山と縄文人に会う旅—》

（ストーリーの概要）

日本の真ん中，八ヶ岳を中心とした中部高地には，ほかでは見られない縄文時代の黒曜石鉱山がある。鉱山の森に足を踏み入ると，そこには縄文人が掘り出したキラキラ^{かがや}く黒曜石のカケラが一面に散らばり，星降る里として言い伝えられてきた。日本最古のブランド「黒曜石」は，最高級の矢じりの材料として日本の各地にもたらされた。

麓のムラで作られたヒトや森に生きる動物を描いた土器やヴィーナス土偶を見ると，縄文人の高い芸術性に驚かされ，黒曜石や山の幸に恵まれて繁栄した縄文人を身近に感じることができる。



【黒曜石と「縄文ムラ」尖石遺跡】

- ⑧ ◎三島市，函南町（静岡県），小田原市，箱根町（神奈川県）

《旅人たちの足跡残る悠久の石畳道 —箱根八里で^{はこねはちり}辿^{たど}る遥^{はる}かな江戸の旅路—》

（ストーリーの概要）

『天下の険』と歌に唄われた箱根山を東西に越える一筋の道，東海道箱根八里。

江戸時代の大幹線であった箱根八里には，繁華な往来を支えるために当時の日本で随一の壮大な石畳が敷かれました。

西国大名^{さいごくだいみょう}やオランダ^{しやうかんちやう}商館長，朝鮮通信使^{ちやうせんつうしんし}や長崎奉行^{ながさきぶぎやう}など，歴史に名を残す旅人たちの足跡残る街道をひととき迎れば，宿場町や茶屋，関所や並木，一里塚と，道沿いに次々と往時のままの情景が立ち現われてきて，遥か^と時代を超え，訪れる者を江戸の旅へと誘^{いざな}います。



【箱根旧街道の石畳道】

⑨ 広川町（和歌山県）

≪「百世の^{あんど}安堵」～津波と復興の記憶が生きる広川の防災遺産～≫

（ストーリーの概要）

広川町の海岸は、松が屏風のように立ち並び、見上げる程の土盛りの堤防が海との緩衝地を形づくり、沖の突堤、海沿いの石堤と多重防御システムを構築しています。

堤防に添う町並みは、豪壮な木造三階建の楼閣がそびえ、重厚な瓦屋根、漆喰や船板の外壁が印象的な町家が、高台に延びる通りや小路に面して軒を連ね、避難を意識した町が築かれています。

江戸時代、津波に襲われた人々は、復興を果たし、この町に日本の防災文化の縮図を浮び上らせました。防災遺産は、世代から世代へと災害の記憶を伝え、今も暮らしの中に息づいています。



【広村堤防が築かれた広川町の海岸】

⑩ ◎岡山市，倉敷市，総社市，赤磐市（岡山県）

≪「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま ～古代吉備の遺産が^{いざなう}誘う鬼退治の物語～≫

（ストーリーの概要）

いにしえに^{きび}吉備と呼ばれた岡山。この地には鬼ノ城と呼ばれる古代山城や巨大墓に立ち並ぶ巨石などの遺跡が現存する。これら遺跡の特徴から^{きびつひこのみこと}吉備津彦命が^{うら}温羅と呼ばれた鬼を退治する伝説の舞台となった。絶壁にそびえる古代山城は、その名の通り温羅の居城とされ、巨石は^{みこと}命の^{たて}楯となった。勝利した^{みこと}命は巨大神殿に祀られ、敗れた温羅の首はその側に埋められた。

鬼退治伝説は、古代吉備の繁栄と屈服の歴史を背景とし、桃太郎伝説の原型になったとされ、吉備の多様な遺産は今も訪れる人々を神秘的な物語へと^{いざな}誘ってくれる。



^{きのじょうさん}
【鬼城山】

⑪ 福山市（広島県）

《瀬戸の夕凧が包む 国内随一の近世港町～セピア色の港町に日常が溶け込む鞆の浦～》

（ストーリーの概要）

夕暮れ時になると灯りのともる石造りの「常夜燈」は、港をめざす船と港の人々を160年間見守ってきた鞆の浦のシンボル。

「雁木」と呼ばれる瀬戸内海の干満に合わせて見え隠れする石段が、常夜燈の袂から円形劇場のように港を包み、その先端には大波を阻む石積みの防波堤「波止」が横たわる。

瀬戸内の多島美に囲まれた鞆の浦は、これら江戸期の港湾施設がまとまって現存する国内唯一の港町。潮待ちの港として繁栄を極めた頃の豪商の屋敷や小さな町家がひしめく町並みと人々の暮らしの中に、近世港町の伝統文化が息づいている。



【灯りのともる常夜燈と雁木】

⑫ ◎豊後高田市，国東市（大分県）

《鬼が仏になった里「くにさき」》

（ストーリーの概要）

「くにさき」の寺には鬼がいる。一般に恐ろしいものの象徴である鬼だが、「くにさき」の鬼は人々に幸せを届けてくれる。

おどろおどろしい岩峰の洞穴に棲む「鬼」は不思議な法力を持つとされ、鬼に憧れる僧侶達によって「仏（不動明王）」と重ねられていった。「くにさき」の岩峰につくられた寺院や岩屋を巡れば、様々な表情の鬼面や優しい不動明王と出迎え、「くにさき」の鬼に祈る文化を体感できる。

修正鬼会の晩、共に笑い、踊り、酒を酌み交わす——。「くにさき」では、人と鬼とが長年の友のように繋がる。



【鬼が棲む奇岩靈窟「鬼城」と表情豊かな鬼の面】

⑬ ◎西都市，宮崎市，新富町（宮崎県）

《古代人のモニュメント ー台地に絵を描く 南国宮崎の古墳景観ー》

（ストーリーの概要）

日本独自の形である前方後円墳という古墳が造られた時代。宮崎平野でも西都原古墳群を始め多くの古墳が造られました。列島各地であまた造られた古墳のある景観(風景)は、時の移ろいの中で様変わりしますが、宮崎平野には繁栄した当時に近い景観が今も保たれています。台地に広がる古墳の姿形が損なわれることなく、古墳の周りには建築物がほとんどない景観は全国で唯一です。

古墳を横から、上から斜めから。いろんな形と古墳のある景観を楽しんでみませんか？



【西都原古墳群】